

暮らしを支えるみなとの情報誌
Vol.99 June 2022

100th
since 1922
Anniversary
日本港湾協会

特集

新しいみなとまちづくり
知恵と工夫による地域の活性化



特別寄稿

新しい「みなとづくり」と

「みなとまちづくり」の展望

一般財団法人みなと総合研究財団理事長

山縣宣彦

開港50年、金沢のまちづくり

元金沢市長

山出保

港湾

6

月号



公益社団法人日本港湾協会
The Ports and Harbours Association of Japan

泉佐野の北前船主・食野家

はじめに

泉佐野市は大阪府内の南部にあり、大阪市と和歌山市のほぼ中間に位置しています。市域は海手の関西国際空港から、和歌山県と境を接する金剛生駒紀泉国定公園に指定された和泉山脈までの間にあります。関西国際空港のあるまちと聞けば、泉佐野市を知らない方でもおおよその場所が理解していただけるのではないかと思います。

江戸時代、泉州佐野村には、中期から末期にかけて、北前船や菱垣廻船による廻船業や御用金の両替などの金融業、新田開発などを行い、巨財を築いた食野(めしの)家という大豪商がおり、その一族である唐金(からかね)家、矢倉(やぐら)家とともに食野一統として商売を行っていました。

食野家

系図によると食野家の先祖は楠木氏の大饗(おおあえ)氏で、初代正久の時に武士を捨て、廻船業に乗り出しました。食野家の廻船業は西回り航路が開かれて北前船が大坂に入港する江戸時代中期から大いに発展しました。大坂から出航する際には木綿や菜種油を積み、奥州からはニシンの干鰯(ほしか)や米などを積み、寄港地で商品の売り買いをしたのです。

江戸時代に刊行された「諸国家業じまん」は江戸、大坂、京都のことをさす「三ヶ津」とそれ以外を「諸国」に、地域をわけて記した全国長者番付です。「諸国」の関脇に泉州の「飯野佐太郎」があげられています。その財は、「大船八十艘、金銀道具数シレス」とあり、他の長者の中でもその船数はずばぬけています。この「飯野佐太郎」が食野家の本家である食野次郎左衛門なのです。

また食野家は廻船業で得た利益を元手に幅広く大名貸しを行い、全国各地の大名が食野家から金銀を借用していたことが、様々な資料からわかっています。

巨万の富を蓄えていた食野家ですが、幕末に廻船業がふるわなくなったこと、明治時代の廃藩置県で大名への莫大な貸金が返金されなかったことで、一気に没落してしまいました。

現在に残る食野家の足跡

食野家の本宅は佐野村の野出にありました。本宅跡はその一部を改修して、明治8年から佐野小学校(現在の泉佐野市立第一小学校)の校舎として使用されました。当時の建物はことごとく改築されましたが、正門の正面にある松は食野家の表書院にあった松で



昭和30年ごろの食野邸跡(泉佐野市立第一小学校)
泉佐野市立歴史館いずみさの所蔵

す。正門脇には校舎内にあった「食野宅跡」と刻んだ碑を移築し、食野家の足跡を紹介しています。

また食野家が建立した菩提寺でもある西法寺には、食野家しか使用できなかった寺への入口の鼓楼門があります。その他にも食野家が佐野村の海岸沿いに建てた「いろは四十八蔵」が立ち並んでいた「いろは蔵通り」、航海の安全を祈願した春日神社、唐金家が航海の安全を祈願して奉納した妙浄寺の梵鐘、食野家一族の墓が立ち並ぶ野出墓地、江戸時代食野家の庭先で紀州藩主に披露したのが始まりといわれる佐野くどきは口説き節の盆踊りで、今でも市内の多くの地域で踊られています。このように食野家の足跡は今でもいたるところで見ることができます。泉佐野市で豪商食野家の足跡を訪ねてみませんか。



現在のいろは蔵通り